

シンポジウム



〈登壇者〉

Tanaka Ekoh

田中恵厚氏

ほろきやうじ
寶鏡寺二十九代門跡

〈登壇者〉

Yamashina Tokichika

山科言親氏

えもんどう
衣紋道山科流30代家元後嗣

〈コーディネーター〉

Murakami Yuko

村上祐子氏

元KBS京都アナウンサー
NPO法人五節句文化アカデミア理事

シンポジウム

「今こそ知りたい京都文化

～ 私たちに受け継がれた文化とは～

村上 皆様、季節の変わり目の寒さの中、お越しいただきありがとうございます。今回は「今こそ知りたい京都文化～私たちに受け継がれた文化とは～」をテーマにお送りします。登壇者は、寶鏡寺二十九代門跡の田中恵厚様と、衣紋道山科流30代家元後嗣の山科言親様です。

お一人目の田中様は京都市上京区にあり「人形寺」でお馴染みの寶鏡寺二十九代門跡でいらっしゃいます。寶鏡寺は尼門跡寺院であり、尼門跡寺院とは天皇家の皇女や王女、あるいは公家の息女がお入りになる所です。京都の尼門跡には内親王が就かれることが多く、父である天皇から季節ごとに折に触れて人形が贈られるとのこと。寶鏡寺も孝明天皇が大切にされていた人形をはじめ、多くの人形を所蔵しておられ、このような人形を毎年春と秋に一般公開されています。

お二人目の山科様は衣紋道山科流30代家元後嗣でいらっしゃいます。山科家は藤原北家の流れで、公家の家職として、宮中の衣装である“装束”を誂え、着せる衣紋道山科流並びに雅楽の笙を伝えられるなど、日本の歴史的な儀礼をもって歴代天皇の側近として仕えておられます。また、各種メディアへの出演や各地での講演会の企画・監修も手掛けておられます。

最後に、私は元 KBS 京都アナウンサーで、現在は「NPO 法人五節句文化アカデミア」の理事として、

私たちが生活文化として年中行事の中で大切にしてきた五節句を、新たな視点から次世代へと継承発展させていく活動をしております。

本日は京都文化に精通されている登壇者の皆様に、長い時の流れの中で、人々の関心や興味が移り変わる時代にあっても、脈々と受け継いでこられた大切な歴史や京都文化についてご紹介いただき、これからも将来に大事なものとしてつむぎ、後世に伝えていくための取組や工夫についてお話しいただきます。

それぞれの取組と文化

村上 それでは、文化の取組について田中様いかがでしょうか。

田中 尼門跡は、寶鏡寺を含む十数か寺があり、昔から宮中や門跡からいただいた雛人形や御所人形を、三月の節句に展示して楽しむ習慣がありますが、先々代の住職が近年地域の子どもの古い人形へのふれあいが少なくなったと感じ、昭和32年の秋から寶鏡寺の所蔵品の一般公開、拝観を始めました。その頃から寶鏡寺は別名「人形寺」としても広く知られるようになり、古い人形を保有しているが後継者がおらず、納めたいという人たちが増え、保存して、中には展示するようになりました。

昭和34年には「京人形商工業協同組合」を始め有志の皆様により「人形塚」が建立されました。人形塚の土台には武者小路実篤氏の「人形よ誰が作りしか誰に愛されしか知らねども愛されたことこそ汝が成仏の誠なれ」という歌が刻まれています。雛人形などの人形は、周りの大人たちが子どもの成長を祈って贈ったものであり、歳を重ねる中で人形がその愛着と共に時を超えて存在し続け、大事にされた幼い日々を思い出させてくれる役割もあるのではと思うと愛おしく感じます。

寶鏡寺では、年末年始以外は年中、人形供養を受け付けており、3月1日のひな祭りと10月14日の「人形総供養の日」には供養祭を執り行っています。また、一般公開は春と秋に実施しており、今秋は





11月1日から14日までの2週間にわたり一般公開しますが、人形塚は大門を入れて右側にありますので、いつでも見学いただけます。

そして、寶鏡寺には「鶴亀の庭」と呼ばれる庭園がありますが、皇女和宮さんが寶鏡寺に滞在された際には、この庭で遊ばれたという話もあります。

村上 庭の手入れも代々頼まれているそうですね。

田中 お庭は毎年手入れが必要で、今年一生懸命やったから来年はいいというわけではありません。植物は気候に左右されるので心配が絶えませんが、専門の植木屋に剪定をお願いし、庭の様子が変わらないように気を付けています。

村上 そうすることで剪定の技術も伝承されていくのですね。

さて、続きまして、山科様に「山科流」や「衣紋道山科流」についてお聞きします。

山科 まず「衣紋」とは衣服や身なりを指します。女性の正装の装束である十二単いつぎぬ からぎぬ（五衣の唐衣）の着付けの場合、前後2人がかりで行います。後ろの者は装束を取り、前の者は襟を合わせたり紐を結んだりしながら、息を合わせて進めていきます。これは男性の着付けの場合も同様に行いますが、今の着物と同様にフリーサイズの着物を何枚も重ね着するため、身体に合わせていかに綺麗に気持ちよく着ていただけるように着付けるかが大事で、そこに技術が発展していき、専門的な「着装技術」を持つ人間が必要になったということです。着付けには20～30分かかり、女性の場合は結髪や化粧にも追加の時間を要しますが、季節や場所、場面をわきまえた「ドレスコード」のように着分けて着こなすセンスや技術が必要で、宮中の着装の役割を担ってきました。また、そのような無形の技術だけでなく、装飾関係の物を作るということに関しても、冠や持ち物、装身具も含めると、金工や塗りなど様々な工芸の結集になりまして、そういったことを事細かく、正確に伝えていくには豊富な知識や技術が必要で、家ごとに文化を伝承して朝廷にご奉仕するのが公家の大きな役割でした。

村上 現代まで技術を伝承されてきましたが、それはいわゆる書物など文書で綴られたもので体得するので

すか。

山科 文書はもちろん代々引き継いでおり、いつ誰に装束を作ったか、どういう時に着付けるのかなど代々日記を残したり、調進の場合は、寸法書きや仕様書きなどを残したりとがしますし、そういった昔からのものを再現性高く現代に作れるように色々な資料を残します。一方で着装の技術というのは、当然文字とかで残すという努力もありますが、基本的には人づてに体得していかないと伝わらないので、基本的には人から人へお稽古しながら続けていくのがひとつの営みとしてあります。

生活に根付く文化

村上 では、京都の文化はなぜこれほどまでに続いているのでしょうか。「御所文化」と「生活文化」の違いも含めて教えていただけますか。

山科 京都の文化は御所を中心に広がっています。御所は都の核であり、そこから様々な文化が発信されてきました。例えば、御所で行われる儀式や祭りの装束は、人形などにも影響を与えています。また、生活文化にもなっている節句や年中行事も、宮中の文化から派生しています。御所が京都の中心であったため、こうした文化は今も京都で保ち続けられています。ただし、現代では御所の儀式が執り行われなくなり、雅な文化を保つ核であったことが感じられにくくなったことで、以前の生活文化も一部が非日常的なものに変わりましたが、東京などに比べるとまだ京都の文化は受け継がれていると思います。

村上 田中様、尼門跡寺院は宮中文化と一般文化が交わる場所ですね。

田中 そうです。ここは多くの宮中の伝統が残り、日常に息づいています。私が入寺した頃、先代からしきたりや習慣を大切に覚えるよう言われまして、初めは理解ができなかったですが、日々暮らしていく中で、少しずつその重要性が分かってきたように思います。御所文化が尼門跡で強く残っておりまして、例えば「お豆腐」を「おかべ」、「お寿司」を「おすもじ」と呼ぶ御所言葉があります。これをご存知の方は少ないのですが、使っていくことで伝統を残せると考えています。季節ごとや行事、伝来史なども徐々に覚え、大切に続けていきたいと思っています。行事や言葉、無病息災や邪気払いの意味を込めた節句事など今日まで続いてきたものに日本人としてのアイデンティティといった大切なものが潜んでいるのではと感じるので、日々のお勤め事はもちろんですが、受け継がれてきたものを大切に、その意味を深く理解していきたいです。

村上 文化サロンの役割では女性が重要な役割を果たしていたと思いますが、いかがでしょうか。

田中 寶鏡寺は禅宗で、金閣寺や銀閣寺をお持ちの相国寺と深い縁があります。禅文化は優美な北山文化



と簡素な東山文化などで象徴されているように文学や美術、建築、芸能など大きな影響を与えており、寶鏡寺でも例外ではなく、仏教の勉強だけでなく、和歌や漢詩、お茶やお花、お香や習字なども学ばれました。また、年中行事や節句も重要視され、お遊びを通じて学びの機会を得ており、貝合わせやかたなどを通じて物語や自然の知識を深め、女性たちは文化を楽しみながら教養を高め、これらの活動のように「文化サロン」としての役割を尼門跡は担っていたそうです。

村上 山科様は以前お話を伺った際に、女性の役割が生活文化において重要だとおっしゃっていましたが、その背後にある文化的な消費について教えていただけますか。

山科 昔から京都の女性は「着倒れ」と呼ばれるほどきらびやかなものへの関心が強く、宮中文化でも女性が主役となっていました。例えば江戸期の「小袖」は女性のためのゴージャスな着物で、その製作にはこだわりがあり、来年の大河ドラマの主人公の紫式部のような女性の創造性や感性が、日本の女性のあり方に影響を与えました。歴史を深く掘り下げると、日本の女性の伝統的な役割や美意識が、今もなお受け継がれているヒントになると思っています。現代の社会構造が西洋的であるなかで、京都においては女性が宮中の女官として活躍している歴史があるとともに、現在でも女性が「女将さん」として活躍されているなど、これらの要素は、京都ならではの女性の社会的な関わり方や役割だと思うので、日本の女性活躍のヒントになるのではないかと思います。

女性がつなぐ文化と伝統

村上 「KYOのあけぼのフェスティバル」は男女共同参画社会をテーマにしていますが、山科様のお話を聞くと、かつて京都では男女の区別なく、女性たちが産業やものづくりに携わり、文化を支えていたことが感じられます。この点についてお話しいただけますか。

山科 社会的な話になると大きなテーマになってしまいますが、家庭や文化の伝承においては、女性は重要な



シンポジウム「今こそ知りたい京都文化
〜 私たちに受け継がれた文化とは 〜」
田中 厚良氏・山科 善雄氏・村上 祐子氏



役割を果たしてきており、経済的な指標に乗らないような文化や知恵の伝承においても女性の存在感は大きかったと思います。京都には、これらの価値観が今もなお残っており、その中に学ぶべきことが多いと感じております。伝統的な家庭の「気風」や「家風」を守りながら女性が果たしてきた役割は非常に重要で、例えば装束の縫製など、女性が守ってきたものが多くあります。東京などの現代的な社会構造での女性の議論も大切ですが、京都ならではの文化や社会的な関わり方も考えるべきだと思います。

村上 今年、文化庁が京都にやってきましたが、どのようなことをお考えになりましたか。

山科 京都には独自の文化や歴史があり、その価値を守りながら発展させるためには、文化行政の強化が必要です。国の政策として、日本発祥の文化を担っている京都を「文化特区」として、特に重要な文化や伝統技術を重点的に支援してもよいのではないのでしょうか。例えば、伝統的な技術や文化に携わる産業が厳しい状況にある中、京都の特有の伝統を守り続けるための助成や補助金、税制面での優遇など、様々な支援があってもいいと思いますし、京都を文化の拠点として位置づけ、そのための予算や仕組みを整えることで、京都が文化的な面で国際的に発信できるような環境を整えることが必要だと思います。

京都文化のこれから

村上 最後に、京都文化のこれからについてお話しいただけますか。

田中 京都の伝統文化や技術は多岐にわたりますが、その多くが現在厳しい状況にあります。伝統的な分業制によって成り立ってきた文化や技術が継続されるためには、支援が不可欠です。例えば、人形の製作など、分業で成り立っており、その分野に携わる多くの方々がいる中で、どれか一つでも欠けると

続かなくなる難しい状況にあります。そのためにも、これらの分野においては積極的な支援が必要であり、取り組むべき課題の一つだと思います。また、伝統文化や技術の継承は日本全体の魅力を発信する上で重要な役割を果たしており、京都が文化の拠点として国際的に発信できるよう、その支援が進められることを期待しています。

村上 ありがとうございます。日本の文化の中心の京都だからこそ、京都文化を受け継いできたからこそ、今の時代に生きている人間がやるべきことが見えてきた気がします。山科さん、京都文化のこれからについて何かありますでしょうか。

山科 今回お話を聞いて考えたのは、「京都にしかできないこと」をもう少し自覚してもよいのではということ、京都は常に新しいものを取り入れながらも、それを歴史的な脈絡に組み込んで伝承してきており、今の時代は文物の流れが速い中、歴史を重んじ、現代の気風を加えて伝えることができる都市として、やはり京都は主体的な役割を果たせる場所ではないかと思いました。そして、自分たちだけで文化を終わらせるのではなく、後世に伝えることが重要で、京都はその役割を担っており、私たちもその中で歴史を引き継ぎつつ、現代的な意義を発信していきたいです。

村上 ありがとうございます。それでは以上をもちまして、シンポジウム「今こそ知りたい京都文化～私たちに受け継がれた文化とは～」を終わらせていただきます。寶鏡寺二十九代門跡 田中恵厚様、衣紋道山科流30代家元後嗣 山科言親様、お話しいただきありがとうございました。そして、皆さま、どうもありがとうございました。

